

出石の阿国

下之卷

有吉佐和子

中央公論社

出雲の阿国〈下之巻〉

©一九六九年
検印廃止

定価五五〇円

昭和四十四年十一月十五月初版
昭和四十六年十一月二十五日三版

著者 有吉佐和子

発行者 山越 豊

印刷 三陽 社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二一
電話(姜)五九二(代)

出雲の阿国 下之卷

題字
花崎采瑛
見返繪
中尾進

第二十四章

お国一座の者の中で歌舞伎の誕生に誰より一番驚いていたのはお国自身だったといえるかもしれない。お菊の踊りに思わず我を失い、舞台へ追って出て掴みかかったのが、客に大受けに受けてしまった。女心の哀しい綾を振り切るつもりで男の髪型に結い上げ、姿はかねて心の片隅にあった化身への憧れをそのまま傾き男に扮したのが、河原の客たちに大当りをとってしまった。

お国は同じことを繰返す気は毛頭なかったのに、翌日から詰めかけてきた客は、お国が男装して女に戯れ、それを傳介が絲繰で分けて入るのを見るまで帰らなかった。それまで十年一日のように続けてきた女装の小唄ぶりなどは、客はもう見飽きたといって、踊りが長ければ足で地を叩いて新しい趣向を催促する。僧衣を剥いで女に変ったと同じように、傳介の女装は人々の意表を衝き、しかもお国の男振りは見事に唄や拍子と合って、客を楽しませた。客の好むことなら続けねばならない。お国は工夫を加えて念仏踊りのときには女装し、それが終ると急いで髪を梳き上げて男鬚に結い、衣裳も着替えた。短くした髪は、女装のときには先を飾り布でくるむので不都合はない。髪を結い直すときは、お松が黙々としてそれを手伝った。

お菊と三九郎は、俄かに殖えた客の前で、しかし少しも面白くないようだった。お菊は自分の一人

舞台であるべき場面を、男装のお国に侵かかされるだけでも愉快でなかったのに、その上男装したお国がお菊でさえ眼を瞠みはるほどよく似合い、水際立った殿御ぶりを見せるのだ。客は男でも女でも、若いお菊よりお国に眼を奪われる。それを無理と思えぬだけに、お菊は面白くなかった。

三九郎にしてみれば、いつだったか末吉家の小者小屋で、傳介とお国が衣裳を取り替えてふざけていたときに覚えた不快感で、もはや鼓をうつ気にもなれず苦くるりきっていた。客は押し寄せている。三九郎が止めても、止めようもないところへ来てしまったことが分っていた。客がこれだけ熱狂しているものを、もう三九郎一人の力ではどうすることもできない。

お国は踊っていた。踊り続けていた。小屋一杯に詰まった客の呼吸が、まるで手にとるように分る。男装したお国の思いがけない妖しさに、人々は心を奪われているのだった。だが、それに半ば酔ってたつぷり踊りながらも、お国は決して満足していなかった。この有様が、いったいいつまで続くのかという不安がある。踊り終って客の帰った後の小屋で、お菊と三九郎の二人が殻を堅く閉じたように口をきかなくなるのも気の重いことであった。表が沸き返っているというのに、舞台の裏は相変らず重苦しいものが詰まっている。お国には次第にそれがやりきれなくなっていた。四六時中、客ばかりが小屋にいるならば、どれほど楽しかろうかと思う。客の前でならば、お菊の袖を掴んで引寄せてさえ、足拍子は軽くて心が弾むのだ。憎いと思っても、そうして並んで踊ってみると、お菊の手振りも足拍子も天性秀でたものがあって、お国はそれが気に入り、トンと同じ足拍子を踏んだ瞬間には、裏の苦々しい間柄を忘れて踊り出してしまふ。

しかし、傳介が出てきて、お菊が引込み、客の爆笑が続くと、お国はいたたまらない空しさを覚えてしまふのだった。そうなってから踊るのは、辛かった。客は傳介の絲縷に腹を抱えているので、お

国の表情は誰も見ていない。

が、ある日、傳介の絲縷に客が爆笑したあと、一瞬鎮まり返った小屋の中央から闇の中の一筋の光明のように、澄んだ笛の音が客席から舞台へ貫きわたった。

「さんざさまでないか」

「名護屋さんざじゃ」

客席の囁きが、ひそひそとひそめきわたっている間、お国は舞台で、まるでその笛の音に魅入られたように立ち尽していた。幾年ぶりで、こういう美しい音を聞いたことだったろうか。音がお国の全身にしみ入るようだった。こういう音に、どれほど久しく会わなかったかと出雲の里で育ったお国には、それは斐伊川の水の音色と変らぬほどの懐しかった。梅庵のところで三九郎の鼓に出会ったときには、全身をめざめさせられた思いをしたものだが、お国はこのときはそれを思い出さなかった。

笛の音は、よほどの妙手が吹いているのか、微かに音色を変え律呂面白く、やがてお国を足も軽く歩きまわらせた。お国は扇子を開いて、胡蝶のようにひらひらと踊り始めた。傳介は自分の役割を終えて、舞台の袖に入ってから、一人で踊っているお国を驚嘆してうち眺め、そして客席の中で悠然と笛を吹き続けている男を見て息を呑んだ。

名護屋山三郎。三三郎とも三左衛門とも、彼の名はあまりはつきりしていない。人々はさんざ、あるいはさんざさまと呼びならわしていた。それは本名を織田九右衛門という彼の、世をすねた仮の名であった。切支丹大名であった蒲生氏郷の愛寵を受け、振袖の間に仕えて高名であった彼は、しかし十六歳での初陣に一番鎧して武功を立てたこともあり、蒲生家中では槍の山三と呼ばれていた武辺者である。太い眉と厚い唇と逞しい顎を持っていた。ただ眼だけは南国の女のように大きくて、睫毛が

黒く長い。蒲生氏郷は織田豊臣の時代を代表できる武将であつたから、その寵を受けたといつても山三が柔弱であつたわけではない。氏郷の好みで南蛮風俗に早くから親しんでいた山三は、当時流行の傾き姿を誰より早く編み出した一人と言えたかもしれない。

この日、満座の視線を一身に浴びていながら平然として笛を吹き続けている山三の身装りは、紅梅の小袖に華やかな呉服を重ね、袖無羽織は赤地金襴の錦に萌黄の裏打ちしたものを着て、紫天鷲絨のしごき帯をぐいと締め、その片端をたたりと流していた。首にかけた刺高の念珠は粒がことのほか大きい。腰には金はり鞆の二尺もある大脇差をさし、梨地蒔絵の印籠やら紺地金襴の大巾着などを派手派手しくぶらさげている。何から何まで目も緩になるほどの絢爛たる装束であつた。

山三がこれだけの贅沢を蒲生家の扶持を離れて浪人している今も続けている理由がある。山三の父は那古屋氏だが、母は織田刑部大輔の女で、織田信長の一族である。山三はどういう事情からか那古屋氏を継がずに母方の姓を襲つたが、本能寺の変の後、織田の天下が終つたあと天正十四年蒲生氏郷に仕官して振袖の間に小姓として出仕するときは父姓を名乗つた。仕官の翌年に早くも九州征伐に従い豊前厳石城を陥すときの一番槍で名を轟かせた。それが目に止まってからか氏郷が彼を愛したのには並ならないものがあつたようだ。切支丹に早くから帰依した氏郷は海外の新しい文物に強い興味を持ってどんどんそれを吸収していたが、南蛮風俗は身を以って取入れ、氣に入りの者たちには自分と同じように高価なものを与えて身につけさせた。山三は氏郷の趣味に従って極楽鳥のように飾り立てられることになった。氏郷を敬慕してやまなかつた山三は、そういうことには少しも抵抗を感じなかつたし、それどころか覚えた贅沢は氏郷が文禄四年に死んだあとも忘れることができなくなっていた。蒲生氏が会津から宇都宮へ移封された慶長三年に山三がその扶持から離れたのは、

もはや氏郷のいない蒲生家に仕える気持は失っていたからであつたが、その他に彼の傾いた習慣が氏郷の遺した華美な風習を矯めようとしている家中にいたたまれなくなつていたのであらう。

金には困らなかつた。氏郷が生前彼に与えた金品は夥しいものであつた上に、彼の妹は美濃金山の領主森忠政に嫁して、一族はみな裕福だつたからである。もつとも森忠政の室となつた妹は山三が浪人して都で遊び暮しているのが気懸りでならなかつたらしく、森忠政が慶長五年に美濃から信州川中島に移封になつた頃からしきりと森家に仕官することを勧めて来ていた。だが山三には山三なりの理由もあつて妹の言う通りになる気はなかつた。

秀吉の天下が終るといふ時期も、彼は蒲生氏郷の死によつて受けた衝撃から立直ることができなかつた。彼が心身捧げて生きてきた蒲生氏郷は、それに相応しい器量人だつたのである。近江の豪族の裔に生れた氏郷は戦国武将の中でも出自がよく、加えて英明であつた。若い頃から信長と秀吉の二代の覇者に可愛がられた。明智光秀が叛乱したとき信長秀吉の妻妾を抱えて日野城に立てこもり、光秀の誘いを蹴つたといふ手柄があつて、秀吉の時代には会津九十余万石の大々名に出世していた。秀吉の心積りでは奥州伊達政宗の押えに氏郷を当てたのであらう。近江の小さな城一つの出自から大々名の会津領主となつた氏郷は、しかし少しも奢るところがなかつた。老境に入つた秀吉の麾下にあつて氏郷は四十歳になつたばかり、武將としても大名としても力を振うのはまだこれからといふ矢先、病を得て実に呆気なく死んでしまつた。家中一同この若さで氏郷が死ぬことなど誰も考えていなかったから茫然としている中で、山三郎も事態がなかなか信じられなかつた。氏郷の可能性を妬んで秀吉が毒殺したのだなどという噂さえ生れるほど、蒲生氏郷の死は思ひがけないことだつたのである。まして氏郷のもつとも身近にいて身も心もひたむきに氏郷に仕えていた山三郎は、牀にぽっかりと空洞

が出来たように、それから浪人して歳月を経てもまだ虚脱から立上れていない。

山三がお国の噂を聞いたのは、阿国歌舞伎の幟のぼりが立って間もなくである。男が女になり、女が男になるといふ評判が彼の興味を惹いた。それでなくてもただ遊び暮らして、二条柳町でも派手に振舞い、六条へ傾城町が移っても彼の蕩児とうじとしての評判は高かったのだ。四条河原も山三はこれが初めてではない。慰めの笛を、彼は気軽くどこでも玩もてあそんだ。お国の踊りもすでに一再ならず小屋を覗いたことがあった。あの小屋で俄にわかに演出が変わったときけば、山三が面白半分に出かけてきたのはいわば当然だったのである。

しかし客席にいて、男装したお国のどこか現うつない顔をした踊りを見ているうちに、山三は今の自分と対面しているような奇妙な気分になった。お国の妖艶な美貌にもあらためて気がついて、我にもあらず何故か慌てていた。山三はその心を鎮めるために腰にさしていた一管をひきぬいて口を当て、吹いた。縹渺ひょうまうとして頼りなげな音律が流れ出て、ふと舞台を見るとお国が扇を開き、山三の笛の音にあわせて流れて水に浮かぶ花屑のように踊り始めている。面白い、と山三は思った。氏郷の所望で吹いてから、何年ぶりか山三も笛に心を入れて吹いたことだったろう。音を高めれば、お国の踊りは高まり、律呂を変えればお国の足拍子が変わった。山三は笛に熱中し、ときどき眼を半眼にして舞台のお国を見た。都に来て、傾城町で遊び呆はきけていた年月をふと思った。この三年に契もぎった女の数は数えきれないが、どの女より美しく、どの女より豊かな女が目の前で踊っている。山三は次第に陶然としていた。

「なごや山三じゃ」

「さんざさまが笛を吹いた」

「お国が山三の笛で踊ったそうな」

阿国歌舞伎の上に、名護屋山三の名がかぶさり、噂は更に評判に拍車を加えた。

が、誰より当のお国と山三の二人が、踊りと笛の音を合わせることに熱中していた。一夜明けてお国が山三の姿を心待ちにしているとき、客席から澄んだ笛の音が響く。山三の方もお国が忘れ難くて、それから三日続いて四条河原のお国一座へ通ってきた。山三の家は四条大橋を渡った寺町のすぐ角にある。

夜になると、お国は春のなま温い匂を持てあまして小屋から出た。鴨川のせせらぎをすぐ傍に聞くと、ところまで来て、深く呼吸をした。寝苦しさに耐えかねて、起きてきたのであった。あの笛の音色が、踊り終った今も忘れられない。笛の音に溶けたようにして踊った後の躰が、まだ踊り足りないのか身悶えしている。

「山三さま」

口に出して呟いてみた。すると俄かに躰が崩れるほど、身に詰まっていた思いが露になった。恋しかった。名護屋山三という男が恋しいのであった。もう何年か三九郎にも触れずにきた女の躰が、頑なに閉じていた女という肉体が、俄かに熱く息ついて、名護屋山三を思い、それは名を口にしたとき、どっと堰を切って自分ではどうしようもないほど激しいものになっていた。憑かれたように、お国の足は四条大橋に駆け上り、寺町へ向って歩き出していた。

山三はその頃、燈明の下で妹の文を展げて読んでいた。この年、山三の義弟に当る森忠政は信州川中島から更に美作みまさかに移封になり、先月半ばには家中を上げて新領地に入国していた。森忠政の室から

の手紙は、その美作から送られてきたものである。文面は、この数年、判で押したように同じもので、兄が折角の武名を持ちながら都に蕩児の噂を立ててただ遊んでいるのを残念に思い、森家に仕えて氏郷に臣従していた頃の武辺を取戻してほしいというものであった。手紙は詳しく美作の風土や地形にまで及んで述べられ、森忠政もこの新しい領土について治めるのにまず築城から始めなければならぬと言っていること、いよいよ戦乱の世は遠のいて長く泰平の御代が続くのであるから、治世の根幹として城も人も小石一つおろそかに出来ぬということ、忠政自身の口から山三の名が出て、仕官の気はないものかと言っていると続いていた。

手紙の文字を目で追っていた山三は、ふと氣配を覚えて顔を上げた。小者の猿二郎が戸惑った顔をしている向うに、女の立姿があった。

「お国か」

山三は呼ぶともなく呟くと、静かに手紙を巻いてから言った。

「上らぬか、待っていたぞ」

山三は猿二郎と鹿蔵という小者二人を従えて氣儘な男暮しをしていた。この家に連れこんだ女はいないかわり、外に出れば放埒三昧に傾城屋を軒並みに荒らしまわっていた。氏郷の死んだあと、戦乱の世ならばともかく、泰平であるばかりに山三にはすることが見当らないのであった。妹の手紙にあるように戦乱の世は遠のいて長く泰平の御代が来るらしい。それは山三も認めねばならないところだった。なぜなら蒲生氏郷の死後、山三が飄然として都に出てきたについては、武辺者として思惑がまるでなかったわけではない。蒲生氏郷が会津に最初四十万石を与えられたとき、小身からいきなり拔擢を受けたにも拘わらず彼は沈んでいて、心ひそかに秀吉を恨み、小藩でも都近くに領地を与えられ

たのであればやがては天下を取る機会もあろうに、会津へ追いやられたかと口惜しがっていたのを山三は忘れていなかった。主君をこの上なく敬愛していた少年山三郎は、天下の中心は都であることをこのとき以来胸底深く会得していた。

秀吉の死後、やがて戦乱の世が再び到来するのではないかと山三は考えていた。大名小名が暗中模索しているとき、浪人者が仕官し易い条件があったにも拘わらず山三が都で遊び呆けていたのは、蒲生氏郷に代るほどの英邁な武将が他に見当らなかつただけでなく、天下はもっと動く、乱れたときに立っても決して遅くないと信じたからである。蒲生氏郷が近江蒲生郡から会津の大々名に成りおおせたように、乱世が来れば名護屋山三郎も織田九右衛門に戻つて鎧やうりを持って立てば、一国一城など軽く分捕れるものと彼は思い描いていた。奥州で上杉景勝かげかつが兵を挙げたという噂を聞いたときには、山三は都にいて勇躍していた。待っていたときが来た。徳川家康が会津へ出かけると、石田三成が立ち、天下は東と西に分れた。山三は、そろそろ自分も立たねばならぬときが来ていると思ひ、氏郷から与えられている十字の槍を取出して武者振いをしていた。関ヶ原の役のあとは、天下は群雄の割拠するところになり麻の目のように乱れるものと思ひこんだからであつた。が、山三の思惑はがりと外れ、長く続くと踏んだ関ヶ原の合戦は半日で終つてしまい、大名も武将も秀吉の唐戦以来金も人も夥しく消耗する戦いくさというものを忌避ひかしたいという意向が強くなつていた。武將にあるまじき消極的な考えが、徳川家康という温厚で堅実な大老の治めるところへ集められていく。泰平の礎いしずえが、そういう形でかたまりつつあるのを、山三は落胆して眺めていた。

いざ立つべしと槍の支度までしていたのに、思惑は外れ、失望した山三は、馴染なじんだ南蛮風俗をいよいよ奇抜に着揃え、傾城屋で人気の遊女と次々浮名を立てた。押えていた血が騒ぎたてたからであ

る。だが、お国の踊りを見て笛を吹いたとき、山三にはある手応えがあった。荒れていた血がふとひき鎮ま^{しず}まって、一人の人間に向って流れようとしている。相手は蒲生氏郷とは較べようもなく違う。女だ。が、これまでに彼の遊び散らかしてきた女たちとは違うという予感がある。

小者の鹿藏と猿二郎の二人は、そつと顔を見合わせると、目を伏せて外へ出た。訪れてきた女が誰か、彼らは知っている。しかも山三は待っていたと言った。彼らは主人の意を常に体していなければならぬ。山三とお国を二人だけにするべき場合であった。

お国は夢中だった。まるで生れて初めて男にとりのぼせたように、山三に手をとられるとすがりついた。このようなことは、もう自分の生涯に二度と再びあるまいと思っていたのに、全身から溢れ出る喜悅に、お国は山三の胸の下でむせび泣いた。そのとき自分が何者であるかということは思わなかった。お国の躰は熟しきっていた。豊満な胸は波打ち、踊りこんだ肩も腰もただ柔くなって山三の愛に応えていた。

山三もまた純粹な感動を覚えながら、お国を抱き寄せ、揉みしだき、その豊かさに感動して顔を伏せた。この歳月を遊んで過していたのに、こうして一区切がつくのかという予感があった。蒲生氏郷の死後まったく虚脱していた中で失われ蝕まれていたものが、関ヶ原の失望でもはや立直るすべもないと思われていたものが、この女で、自分は取戻せる。その確信が、山三を大胆に振舞わせた。お国の躰は素晴らしかった。山三のどのような愛にも応えられるようだった。彼女の齢も生い立ちも、何をしている女かということも、このとき山三は少しも考えなかった。

「山三さま」

「お国」

互いに名を呼びあつてから、お国も山三もあ待つていた相手だったと思い、目と目を見詰めあつた。山三はお国を美しいと思つたが、お国は山三を頼もしいと思つていた。これほどの男に会えて、その愛を享^うけ得たことが身悶^{もも}えしても足りないほどありがたかつた。

言葉にして語り合つたことは何もない。山三が何を考へている男なのか、お国は何一つとして知らないのに、あの笛の音が何もかも雄弁に語りあげていたようにお国には思われた。お国が求めているものを、山三は知っているとお国は確信していた。

夜が明けて、別れるとき、山三は無造作に自分の脇差を取つて、

「これを使え。傾き男が無腰では形がつかぬ」
と言つて与えた。

二尺の大鞘に黄金を張つた華麗な作りの大脇差を、お国は押し頂いて言葉もなかつた。重い。これほど見事なものは、かつて誰からも与えられたことがない。それが山三の身分を現わす刀剣であるだけに、お国の喜びは深いものがあつた。

髪飾りで切つた毛先を飾り布で隠しながら、お国はそつと山三の様子をうかがい、訊いた。

「山三さま、今日は小屋には」

「行こうぞ、笛を吹きに」

その笛こそ踊るお国には命^{いのち}であつた。お国は山三の返答に、心から安堵して、袖に二尺の脇差を抱きしめると、全身を再び女の喜びに浸して山三の家を出て、四条河原の小屋に戻つた。

早い客は、そろそろ小屋の入口を覗いている時刻であつた。お国はすぐに化粧にかかつた。今日も舞台だ。今日も山三さまの笛が鳴る。そう思うと、三九郎とお菊の存在などもう眼の隅にも入らない

ほど心が昂^{たかよ}り、幸せが胸に詰まった。

見るかひありて嬉しきは

契りし今朝の玉章

除目の朝の上書

忍ぶこと若し顯れて人しとに

こなたは数ならぬ軀^み

そなたの名こそ惜しけれ

惜しからずの浮名や つつむも忍ぶも人目も恥も

よい程しかの事かのう

その日のお国の唄声は初夏の薫風が緑の中を走るように爽やかだった。詰めかけた見物を、お国の伊達姿は魅了しつくしていた。山三の笛が鳴る。お国は腰の差物を片手で押え、右に扇を持って伸びやかに踊った。刀は重かった。踊るにも動くにも無腰のときより倍も力がある。が、お国の躰には力が充ち満ちていた。軽々と踊れた。

一夜明けてから、お国の腰に見事な大脇差が輝やいているのに、三九郎も驚いたが、傳介はもっと深い衝撃を受けていた。客席から聞こえてくる笛に悠然として笑いかけるお国の横顔を見れば、山三